

第 54 回学術大会（鹿児島）における若手会員学術企画によせて

顎機能研究に私が強い魅力を感じてから、もうかなり長い時間が過ぎました。しかし、私にとっての顎機能研究の魅力は今でも輝きを増すばかりで、色あせたことはありません。

大学院時代は細菌学の研究をしていました。これはこれで楽しく、新しい現象を見つけては発表し、論文を書き、喜々としていました。自分の人生の中で最も楽しい幸せな学生生活でした。顎機能との出会いは、大学院を卒業して出張病院に勤務し、顎関節症患者の診療をするようになってからです。それまで明らかにされていなかった顎機能の臨床不思議と出会い、疑問や発見を積み重ねると、それは直接的に患者さんの幸せに結びつきました。それは私には大きなまぶしい魅力の光でした。

若手の皆さんを突き動かす「不思議」と「喜び」は何でしょう？さて、『“若手研究者”がワクワクする面白い（科学的な意味で）領域“再定義”達成』を楽しみにしています。

会長 皆木 省吾

若手会員による学術企画によせて

第 52 回学術大会（岡山）から、皆木会長の創案で、口演を果たした 39 歳以下の会員が優秀な若手口演者を互選する「学術大会優秀賞」が新設された。本賞の目的は若手会員のインセンティブならびに学術大会の活性化にあり、受賞者は栄誉とともに次々回学術大会の学術企画に参加する責務を負う。

第 54 回学術大会（鹿児島）は受賞者による学会企画が催されるはじめての学術大会となり、以下の企画は第 52 回大会受賞者である若手会員らが思案と議論を重ねた結果である。3 名の若手研究者（受賞者 4 名中 1 名は次世代同朋を世に出すというより重要な責務のため、発表者としての責務を免れた）が創造する 35 年後の顎口腔機能学とは果たしてどのようなものであろうか。

若い力が思い描く未来像が会員個々の研究に清新なヒントや鮮烈な刺激を与えてくれると期待する。

学術担当理事 服部 佳功

第 54 回学術大会 学術企画

シンポジウム 「機能研究の未来創造 ～2050 年の顎口腔機能研究～」

【企画趣旨】

“顎口腔系の諸機能に関する基礎ならびに臨床の真理を追究し、その進歩発展を図ること”を目的とする日本顎口腔機能学会は、前身である日本 ME 学会専門別研究会の発足から 30 年余りとなる。近年、顎口腔領域の機能研究は検査機器の発達や研究手法の発展によって、その成果が多岐に渡るものとなってきた。

本企画は、第 52 回学術大会において優秀賞を受賞した若手研究者 4 名が、皆木会長から『“若手研究者”がワクワクする面白い（科学的な意味で）領域“再定義”達成』というテーマを与えられ起案したものである。我々はそれぞれが専門とする研究分野における機能研究の今後の発展を創造することで、多様化する顎口腔機能研究を再定義して、将来の機能研究の在り方についてのヒントを見つけることができるのではないかと考えた。

我々が自身の研究を集大成する時期は 2050 年頃、つまり今から 30 年余り先である。本シンポジウムでは、その頃に我々の研究がどのような地点に到達しているのかを、先達とのビデオ対談を交えながら、会場の皆さんと創造できればと考えている。よりリアルに今後の顎口腔機能研究の方向性を会員の皆様とワクワクしながら討論できれば、きっと未来の顎口腔系の機能研究が切り開かれていくのではないのでしょうか。

文責 兼松 恭子（鹿児島大学）

【講演内容】

『感覚刺激がもたらす嚥下機能の変化』

真柄 仁（新潟大学）

共同演者：Prof. Shaheen Hamdy（University of Manchester）

口腔咽頭への反復、継続する感覚刺激が嚥下に関わる神経機構の可塑性変化を惹起するならば、この機序を応用した嚥下障害の新たな臨床術式の開発の可能性が期待できる。嚥下の基礎研究で著名な Hamdy 教授との対談を通じて、近未来の嚥下研究や嚥下障害の臨床を展望する。

『口腔咽頭の機能障害とその変化 ～神経－筋疾患患者を中心に～』

皆木 祥伴（大阪大学）

共同演者：苅安 誠（京都学園大学）

神経－筋疾患患者に対する構音・嚥下障害のリハビリテーションには多くの医療職種が連携して関与し、これら機能の評価に加えて、舌や軟口蓋の運動評価が行われる。言語聴覚士として音声言語障害を研究された苅安教授との対談で当該領域の研究と臨床を展望し、近未来における歯科医師と言語聴覚士の臨床・研究に跨る連携のありかたを考察する。

『顎口腔機能と関連した脳機能評価技術の発展』

大本 勝弘（徳島大学）

共同演者：原田 雅史（徳島大学）

脳機能評価は咀嚼における運動制御、顎顔面痛に対する防御機構、睡眠時ブラキシズムの発現機序など、顎口腔機能研究の多領域でその発展の基盤をなす技術といえる。脳機能イメージングが専門の原田教授に当該分野の現状と課題、近未来の展望を伺い、その発展が顎口腔機能研究にもたらすインパクトを考察する。